

情報産業論 (Ⅷ)

阿 部 耕 一 朗

(受付 2002年10月11日)

宗 教 産 業

以前この論考を書き始める頃、何回連続して執筆するのかと聞かれた時、いくつかの項目を挙げて、最後に宗教産業と言うと、怪訝な顔をされた事がある。そのうえ、あれは産業ですかと質問された。その時私は、今現在、日本で宗教得業者（僧侶、神官、牧師など全てを含む）は、676000人に達しており、これらを主体とする生計維持者を含めると、216万強の人たちが存在すると言う事になる。これだけの人たちに生計維持を可能とする業種なのであるから、これは立派な産業であると、強弁したのである。

しかも、人類が一番、最初に手がけた情報産業は宗教である、と言うと、そのことには誰も異論を挟まなかった。つまり人間固有の仮想空間の、最初の成熟期を象徴するものが宗教である可能性は非常に高いのである。

このことは既に何度か触れたように、人間の発明した言語の発達プロセスと、非常に緊密な関係を持つのである。人類が保有する言語も、最初の段階では、他の動物達の持っているサイン言語（意味内容が固定されている音列）、に近いものであったと考えられる。しかし直立歩行により他の哺乳類に比べて、異常に広い口腔空間を保有する事により、多種類の音韻制御が可能となり、そのことがその音列に分節化をもたらすことになる。

この分節化により、現在人類の言語すべてに見られるような品詞区分が生まれるわけである。恐らく一番初めに生まれたのは名詞であろう、次いで動詞が生まれたと考えられる。

分節化の最初の段階では、空間事象の伝達についてのみ使用可能な段階であったと考えられる。

おそらくその時代の後半頃から印欧語における格の、日本語においては格助詞の発達が起こったものと考えられる。その次に助動詞、の誕生をまっけて時間軸空間における事象の伝達が可能となってくる。この段階から人間個々の脳中に、独特の仮想空間が生まれてくる事になる。これが分節化された個々の言語の持つ意味イメージによって構成される情報空間である。

言語発達の最後の段階である成熟期は、因果連鎖の記述可能な段階である。この段階にいたって、初めて人間相互の取り交わすメッセージ空間に物語性が生まれてくる。これが言うならば芸能の起源であろう。そうして特定の間人集団の間で取り交わされる説話群の中でその成員の多数によって好ましいと考えられたもの、あるいは潜在願望に合致したものだけが、神話、伝説として語り伝えられたものと考えられる。

このような言語発達の3段階区分をもっともシンボリックに体現した意味変換事例が、すでに触れたように、英語の“while”、ドイツ語の“weil”、日本語の“間”と言う単語の示した意味変換である。(これらは最初の段階では空間事象を表示する、物と物の間を表示する単語として生まれてきたものであるが、やがて時間事象を表示する時間的間隔をも表わすようになり、最後はいずれも原因理由を表わす接続詞に転化している。)

言語も、多様な音節制御によって分節化されることにより、意味内容固定型のサイン言語から、驚異的な意味多様性を持ったシンボル言語に転換するのである。ちなみに60音節によって表示されるメッセージも最後の3音節が、“である”の場合と、“でない”と表示される場合とでは、60分の2音節の差によって、意味内容が全く逆になる。

さまざまな説話性を形成するものは、因果連鎖にほかならない。このようにして個々の人間の多様な情報空間が形成されるようになると、個々のイメージ空間相互の間に、ある種の秩序化が求められるようになる。この秩序の根幹を形成するのが美意識なのである。

一つの説話を共有する人間集団のほとんどの成員が、その説話の悲劇的部分において同じ種類の涙を流す時、そこには美意識の共有化現象が生ま

れる。人間を包み育むコミュニティと言うのはこのような共有化された美意識の厚い層を持った人間集団のことを指すのである。

コミュニティ現象を健全に保有する人間集団においては、個々の成員は次第に共通の行動パターンを示すようになる。このことは共有化された厚い美意識の層の中から芽吹いたエトスによる秩序化の結果なのである。

この段階になると、成員の間に世界と言うものがこのようであったら良いなと言う集団願望も育ちはじめる。この集団願望を擬人化すると、それがその集団の神仏に転化する。

宗教の誕生というのは恐らくこのようなステップを経て生まれて来るものだと考えられる。しかし集団願望の多岐、多様性は恐らくさまざまな神神を生み出す事になるであろう。これらの神神の秩序化をはかるために生まれてくるのが神学体系なのである。従って神学体系と言うのは、複数の神神を秩序付けるための説明仮説であるとも言える事ができよう。

このような概念図式は、技術と科学の関係についても当てはまる。科学というのは、さまざまな技術的体験を統一的に秩序づける説明仮説として生まれてくるものなのである。勿論、中には科学によって生まれた論理演算課程を通して、演繹的に生まれてくる技術もたしかに存在しうる。しかし基本的骨格の部分のみを見れば、本来多様な技術的体験を統一的に説明するための説明仮説が科学の実態である。

宗教現象についても、似たような概念図式が存在する事がありうる。例えば擬人化によって生まれ出た神を、集団全体での共有現象として、より強固なものにするために褒め称えるための新しい説話の誕生がありうるし、神の庇護下にあると感じる事の喜びを、体によって表現する舞や踊りの誕生もありうる。その部分のみを見れば、芸能と言うものが宗教祭事の一つとして生まれたとする、これまでの定説を強化するに十分の現象と考えられようが、その前段階としての共有化された美意識の厚い層が無ければ、神の誕生には至らなかったはずであるから、そのためにも物語性豊かな説話群（つまり芸能）によって前段のステージが整備されていなければならな

いと考える方がより自然な考え方であろう。

ここで具体的に、日本における神社形成のケーススタディをひとつやって置くことにしよう。すでに芸能の歴史において重要な役割を果たす熊野三社については触れておいたが、我が国において、最も末社の数の多い神社としてあげられる、八幡宮の起源について考えてみよう。

全国に散在する数多くの八幡宮の基幹神社は、言うまでもなく大分県国東半島の付け根に所在する宇佐八幡宮である。日本の歴史を議論する時に、必ず取り上げられる事項として、古代卑弥呼によって統治されたと言う邪馬台国の所在地が挙げられるが、近畿説と北九州説があって依然としてまだ結論が出ているわけではない。

その北九州説においても、現在では福岡県山門郡が有力な候補地として挙げられているが、この宇佐を中心とした地域に残る説話などから考えると、この地もその候補地として挙げて不思議は無いと言っている状態にある。

実際に宇佐八幡宮に参詣して見ると、その本殿は三つの社の連携として祭神が鎮座しており、祭神自体は応神天皇と神功皇后と姫神と言う事になっている。

しかし、応神天皇と神功皇后については、初めから祭神であったとは考えられない。と言うのは記紀を中心とする歴史記述から考えて、この二つの祭神の活躍時代よりずっと以前にすでに八幡宮は存在したはずだからである。これは恐らく、宇佐神宮側と大和王朝側との政治的連携が起こってから始まったと考えるほうが妥当であろう。とすれば、本来の祭神は、単に姫神としか記載されていない女性の神様を挙げるしかないであろう。

記紀神話を中心とする歴史記述については、日本史研究者の間で、応神天皇および神功皇后の時代は人為的に120年引き伸ばされた可能性が高いと言う事は、すでに定説となっている。また姫神と言うのは恐らく神に仕える巫女ではなかったかと考えられる。

北九州地域というのは、古代より朝鮮半島から渡来してきた人たちが多

く生活してきた地域と考える事が有力である。おそらく宇佐神宮も朝鮮半島から渡来してきた人たちが氏神として持ってきた神であると考えるのが一番自然であろう。

一方で、日本列島では古代より、秦氏の後裔であると自称するコミュニティ集団が散在している。それらの集団の中には、秦の始皇帝を先祖とすると言う説話も残っている。宇佐八幡宮を氏神とするコミュニティ集団の中にもその説話は残っている。

この秦氏の後裔と自称する集団の特徴の一つに、いずれも技能者集団ではなかったかと考えられる徴候が濃厚である。京都近郊の太秦と言う地名は今では映画撮影所の所在地として有名であるが、この地も秦氏の後裔と自称する集団の生息地であり、機織りの技能者集団であった可能性がきわめて高いと言うのが定説である。

宇佐八幡宮を氏神とする秦氏族も銅精練の技能者集団であった可能性が高い。そのことをもって、東大寺の大仏鑄造を契機として当時の大和王朝との政治的連携がいきに深まった可能性が高い。その後には道鏡の皇位篡奪の目論見を見事に逆転させると言う離れ業をするほどに大和王朝の政策決定に深くコミットするのである。

しかし、この宇佐八幡宮も最初から宇佐の地に定着したわけではない、この神社の元宮とされる有力な神社が北九州地域に二箇所存在する。一つは金達寿がその著“日本の中の朝鮮文化”に記載している場所、つまり福岡県行橋市の西に所在する香春岳のふもとにある香春神社である。香春岳と言うのは山岳修験道の聖地として有名な英彦山を中核とする山脈のなかの一山陵である。もともとこの地は、古代より大和王朝に匹敵するほどに整除された政体があったところと考えてよいであろう。記紀を中心とする歴史記述においては“磐井の乱”と呼称されているが、これはあくまで勝者の論理による記述であって、本来大和王朝に帰属すべき集団が内乱を起こしたかのように扱われているが、その当時のこの地域の行政組織を初めとして、当時の朝鮮半島への外交能力から考えても大和王朝に匹敵するほど

の国家であつたらうとするほうが自然であろう。今も残る磐井の陵墓の規模から見ても、そう考えられる。香春神社と言うのもそのような地域に住むコミュニティ集団によって支えられてきた神と思われる。しかもこの神社の近くには古代から採銅所があつたと記録に残っており、これのための採銅洞窟“マブ”が現在でも残っている。銅の精練技術者の集団との関係の深さが想像できる。

もう一方の宇佐八幡元宮と言うのは、司馬遼太郎の“街道を行く”のなかに記載されている神社である。これは大分県中津市郊外に所在する薦神社を指している。この神社の御神体は、同神社に所在する池であるとされており、現在でも宇佐八幡宮の最大の神事は、この池の真薦を刈る事であるとされている。刈った真薦は束ねられて枕にされる、その枕が宇佐八幡宮のいわゆる神座であり、御神体であるとされているのである。

これら二人の所説を見る限りでは、いずれも首肯すべき論理性があり、それを裏づけるだけの説話資料も整っている。その限りではどちらも捨てがたいものである。

ここはどちらも宇佐八幡の古宮であつて、朝鮮半島から渡来してきたコミュニティ集団が北九州に上陸して、徐々に南下して宇佐の地に定着するまでに、途中一時定住した場所で自分たちの氏神を祭った痕跡と考えるのが、一番妥当であるように考えられる。

宇佐の地からすぐ近くに国東半島が所在するが、此処は六郷満山と言われて仏教系の古い寺院や磨崖仏が各地に点在している。実際にこの地を歩いて見ると、仏教の聖地ではないかと思われるほどである。しかしこの国東仏教寺院はいずれも宇佐八幡宮と密接な関係を持っており、全体で宇佐の神宮寺の役割を果たしていたのではないかと、と思われるほどである。

また一方、英彦山を中心とする修験道も宇佐八幡宮と密接な関係を持っていたようである。従つて八幡信仰の本当の実態を明らかにするためには、これらの三つを総合的に解明する事が必要であり、今後の課題として残されていると考えてよいであろう。

ところで八幡信仰に関しては、もう一つ問題がある。それは鹿児島神宮の提起する問題である。この神社は、鹿児島県始良郡隼人町に所在し、古くから正八幡宮と呼ばれていた神社である。

正八幡宮、つまりこれが本当の八幡宮であると言わんばかりの呼称である。南九州一帯では古くから八幡と言えば、こちらの神社のほうが尊崇の対象になっていたことは、確かなようである。しかもこちらの方は、その近郷に残る説話によると神武天皇創建と言うことになっている。

近年、花粉分析一筋に研究を重ねてきた安田喜憲が、中国大陸での花粉分析の結果を踏まえて、この地域ではかつて黄河流域の文化と、長江（揚子江）流域の文化の抗争があつて黄河文化系が長江文化系を制圧し、現在の中国文化の骨格を形成したと言う説を発表している。しかも制圧された長江文化系の人達は、現在におけるポートピープルよろしく大挙して日本列島へ移住したとしている。

長江文化と言うのは、いわゆる照葉樹林文化つまり農耕を中心とする文化であり、黄河文化と言うのは、これに反して半放牧を前提とする文化である。このことを中国の歴史に振り返ってみると、ちょうど秦の統一と、その後の前漢の成立時期に当てはまりそうである。しかも秦の発祥の地は、現在の四川省を含む華南である。また前漢の方はどちらかと言えば華北に基盤を持った種族である。

秦の国内統一は始皇帝に関する説話をはじめとして、歴史上では大きい意義を持つものとして取り上げられる割には、その治世年代は、わずかに30年前後である。それに引き換え、その後の前漢の時代は、ほぼ200年を超える。

この事から考えれば、秦が此処で言う照葉樹林文化圏（長江文明）を代表するもの、また前漢が半放牧文化圏（黄河文明）を代表するものと考えても間違いでは無さそうである。おそらく前漢に制圧された秦の遺臣達の中には、その初期の段階で朝鮮半島南端に亡命した人たちも居たであろう。その人たちの中から北九州まで落ち延びた人たちも居たと考えれば、その

種族の相伝説話の中に、秦の始皇帝の末裔であると言う説話が残る事は十分に考えられる。また華南の地からポートピープルよろしく日本列島にたどり着いた人たちが定住した場所が隼人町（なお此処には大和王朝から征討された熊襲をいたむモニュメントとして隼人塚も残っている）であったとすれば、この二つのグループは、溯れば同根の文化に帰属する人たちであったのではないかと考える事も不可能ではない。とすれば北からたどり着いたグループも南から来たグループも似たような八幡信仰を持ったとしても別に不思議な事ではない。

和歌山県熊野に鎮座する、熊野権現三社がミクロネシアから日本列島にたどり着いた種族の氏神ではないかと言う事については、すでに触れておいたが、これらを総合して考えれば、埴原和郎がかねてから主張する、日本文化二重構造論と言うのも、一方をミクロネシア系と考え、もう一方を大陸系と考えて両者の複合によって形成されたものと考えれば、もっともな所説であると納得できる。

集団願望の擬人化によって生まれ出た神というものも、それを中心として形成された説話群のもたらす情報空間には、そこに帰属する人間団のさまざまな生活体験の中から生まれた暮らしの知恵に類するものも、その神にかかわりの深い形で、見事に伝承されている。このことから考えれば、世代間の情報伝達メディアの役割をも果たしていたと考えても良いであろう。やはりこの面から見ても立派に情報産業である。

コンピューター産業

ハードウェアとしてのコンピューターを作る業種を情報産業のカテゴリーに入れるには若干の躊躇を感じざるを得ないのであるが、梅棹忠夫流に言えば、人間の個体を形成する神経系の拡張を支える素子の生産に従事する産業と言う事になり、情報産業そのものとは言い難いけれども、非常に関係の深いものと言う位置付けは可能である。

現に、最近の医学分野における各種の測定機器を見れば、中型以上のも

ので、CPU内臓でない物はほとんど無いと言っても言い過ぎではない程である。なぜそのような状態になったかをここで少し考えてみよう。

人間が情報を表示しようとする時に使う方法には、大きく分けて2種類の方法がある。それはデジタル表示とアナログ表示とである。デジタル表示と言うのは、あえて断るまでもなく、数値による表示であり、アナログ表示と言うのはこれに引き替え、図形による表示である。

しかもデジタル表示されたものは、それ自体デジタル表示されているのであるから、数値演算論理に基づく加工処理が非常に容易であり、かつ高速処理が可能である。また人間と言う生き物の個体に自然に装備されている各種のセンサーは、いずれもアナログ表示への適性の高い物ばかりであるから、アナログ表示されている情報からは、おかれた状況の全容を迅速に、かつ的確に理解することが可能である。

このことは、時間を知るために利用する時計を考えてみれば、容易に理解できるであろう。アナログ時計で時間を確認する時には、その時点での時間を確認すると同時に、ある決められた時間までに、何分あるか、まで同時に確認している。ところがデジタル時計によって、これと同じ操作を行なった場合、あと残余時間が何分あるかは、頭の中で演算して見る事が必要である。つまり、その演算時間に要するだけ、たとえそれが極めてわずかな時間であったとしても、理解が遅れる事になるのである。

医療用機器について考えてみよう、現在は人間の体内の状態がかなりの部分で、見る事が出来るようになってきている。妊婦の子宮のなかで生息している胎児の状況も見ることが出来るし、人間の眼球の形状も測定出来るようになってきている。したがって胎児の性別がずいぶん早い時点で分かるようになったし、近視の強い眼球は、奥行きが長くなった状態を呈しており、そのために水晶体の偏光能力だけでは結像焦点が網膜まで届かず、映像がぼけて見える状態である。したがってその奥行きを測る事によって、外部レンズによる偏光能力で、どの程度補強すればよいか分かる時代になっているのである。勿論これらは、その生体を傷つけないために、超音波を使っ

てデータ採取を行なっている。

このように、これまでであれば切開して見る以外に、方法が無かった場所が、容易に見る事が出来るようになった事が、現代医学の驚異的進展を、大きく支えている事が理解できるであろう。

この事は、コンピューター CPU が初めからデジタルコード演算用に作られた素子であると言う事と、アナログコードからデジタルコードへの変換も、その逆の変換も極めて容易に処理する事が出来ると言う特性を持っているからである。

しかも、その演算速度が、今では 8 テラ FLOPS という驚異的速度を持つコンピューターが現実に存在する時代なのである。この速さは、移動小数点計算式の演算を 1 秒間に 8 兆個計算できるという代物である。したがって、かなり大量の演算を必要とする処理であっても、人間の眼から見れば一瞬間の操作のように見えるわけである。

かつて私は汎用大型コンピューターを 3 台持って、各種のデータ処理をまかなう部門の部長をやったことがあるが、ちょうどその時代が汎用大型機の最後の時代に差し掛かった時期でもあったので、その後のパーソナルコンピューター時代を含めて、コンピューター産業の未来について、あれこれと考えた時期がある。そうして、その事を前著“情報化社会への戦略”の中で、一部触れた事があるが、その要旨は、小型機も大型機もそれぞれ違った道をたどって、それぞれの用途を進展して行くであろうという考え方である。

小型機つまりパーソナルコンピューターについて考えれば、人間社会の中に現れてくる機器商品と言う物は、どんな場合でも初めは組織用機器として生まれてきて、やがて成熟期に達すると、パーソナルユースつまり個人用機器に成ってくる、と言う鉄則、自動車にしても、電話にしても、全てそうである。テレビの場合もそうであった、かつては野球が見たい、とか相撲が見たいと言う時には、別に欲しくも無いのに蕎麦屋や喫茶店に行ったものである。蕎麦屋や喫茶店と言うのは、一面で地域社会におけるコミュ

ニティ拠点としての役割も持つので、集客用と言う事も含めて組織用機器としていち早く設置されていたのである。現在ではすでに家庭と言う組織ではなく、すっかり個人用機器に成ってしまっている。このことから考えれば、コンピューターと言う商品も限りなくパーソナルユースに耐える商品になった時が商品としての成熟期であると考えたわけである。

また一方、大型機については、巨大なシミュレーターになる道が残されていると言う考え方である。

しかし、この二つの機器郡の目指す方向への技術開発のあり方は、かなり違っている。小型機の場合は組み立て用素子、部品の徹底的な小型化が求められる。と同時に演算速度の高速化も求められる。

このことは、LSI素子を限りなく小型化するという事と、水晶発振器つまりパルス発振周波数の時間間隔を限りなく微少間隔にすると言う事である。素子の小型化と言う事は同時に演算回路の短縮にもつながるので、演算速度の高速化にも効き目がある。このようにして出来上がったのが、現在流通しているパーソナルコンピューターなのである。

一方、大型機の場合を考えて見ると、人間の知的関心の基本構造が常に未来志向的であって、未来に関して知りたいと言う強い欲求を持っていることから、生まれる事を期待されているのがシミュレーターである。このような欲求を満たす機器に求められる機能としては、現在の応用数学の中でも、多変量解析を始めとする演算を、高速にやり遂げられるものでなければならぬ。これらの演算プロセスの中には、大量な行列演算が、含まれている。これを可能にするには、演算システムの中に搭載されているCPUの数を増やすことが必要になって来る。また未来時点での状態にたどり着く課程において、無数に存在する変化因子の数だけCPUを搭載して、それぞれその因子特性に見合った変化をさせるには、搭載すべきCPUは多ければ多いほど良いと言う事になる。このようなマシンはどうしても超大型に成ってしまうのは当然である。したがって私は超大型汎用機のたどるべき道であると、以前書いたわけである。最終的には、社会現象に関するシ

ミュレーターが最も求められる物であるだろうが、これを完成させるにはシミュレーションプロセスに介在する因子特性の解明が徹底して為されていなければならない。その意味では自然現象に関するミュレーターの方が、はるかに早く完成するであろうと思われる。

このことは、前著においても一部触れた事であるが、人類が精巧なミュレーターを手に入れると言う事は、時間軸の望遠鏡を手に入れると言う事でもある。

これまで、空間軸に関しては光学機器として望遠鏡や顕微鏡を開発し、空間距離を極端に制御し、裸眼で見えない物を見えるようにする事によって、多くの知的資産を獲得してきた。それだけではない、光学機器はいずれも対象物にあたった反射光を結像させて見るわけであるが、先に挙げた医療機器の場合は、光の当たらない部分を見るために、音波や電磁波と言う他のメディアを使って見えるようにした装置である。空間軸に関する部分については、ほとんどの物が可視領域に入ったと考えてよいであろう。

しかし、人類が初めて高倍率の望遠鏡を手に入れた時、大変なカルチャーショックも起こっている。ガリレオガリレイと言う男はそのために、あわや命まで失いそうになった程である。

時間軸の望遠鏡を手に入れる事が出来た時には、それに倍するカルチャーショックが起こりそうである。しかし人類社会の未来構築を間違いなく遂行するためには、何としてもたどり着かなければならない目標でもある。

参 考 文 献

- 阿部耕一郎・舟場正富共編 情報化社会への戦略 1991年 溪水社
石 弘之・安田喜憲・湯浅赳男共著 環境と文明の世界史 2001年 洋泉社
上田正昭著 古代の道教と朝鮮文化 1989年 人文出版
大分県高校教育会 大分県の歴史散歩 1993年 山川出版社
鹿児島県高校教育会 鹿児島県の歴史散歩 1992年 山川出版社
金 達寿著 日本の中の朝鮮文化 第11巻 1994年 講談社
児玉徳美著 言語のしくみ 1991年 大修館書店

阿部：情報産業論 (VIII)

- 司馬遼太郎著 街道を行く 第34巻 1994年 朝日新聞社
埴原和郎著 日本人と日本文化の形成 1993年 朝倉書店
福永光司, 千田 稔, 高橋徹 共著 日本の道教遺跡 1987年 朝日新聞社
安田喜憲著 龍の文明, 太陽の文明 2001年 PHP 研究所
安田喜憲著 森を守る文明, 支配する文明 1997年 PHP 研究所
大和岩雄著 日本にあった朝鮮王国 1993年 白水社
山口 敏著 日本人の生い立ち 1999年 みすず書房

Summary

On Information Industry (Part VIII)

Kohitiroh ABE

In this article is studied, the social role of religion in Japan. And Japanese “Hatiman-sinkou” support the basic structure of Japanese beauty sense. And, what kind of change the society did according to the direction that the computer is developed, was studied. In near future human beings will get the telescope of time phase, and it will bring the great culture shock in human society.